

八百万の神に見る 日本人の力

日本に息づく“八百万の神”信仰。この神々が生まれた歴史に思いをはせると、古代から脈々と受け継がれている日本人の精神と文化の原点が見えてきます。

日本人のルーツは長江文明をつくった人々ではとの仮説があったり、今も奈良に百済(くだら)がなまった橿羅(くじら)という地名が残るなど、古代の日本列島にはさまざまな文明、神をもつ複数の民族が集まってきていたのではないのでしょうか。民族間で熾烈な文化闘争が起こったであろうことは想像に難くありませんが、人々は生きていくため互いの存在や信じる神を認め合う道を選びました。そこで生まれたのが“八百万の神”という考え方ではないのでしょうか。他者を許し、認める、それによって人と人、文化と文化が融合する、これが日本人の心の原点なのです。

ところで、神道の祭祀に用いられる大祓詞(おおはらえことば)には、人の罪の祓い方が述べられています、その根本には「人間は生まれたときは無垢で穢(けが)れがない。たとえ悪いことをしても神様の前で禊(みそぎ)をすれば無垢な状態に戻る」という考えがあります。さらに、日本にはどんな悪い人も死ねば神・仏であるという人生観も根付いています。私はこうした人間存在の根本への全面的な信頼もまた、相手を許し受け入れる日本人の寛容性の基盤になっていると考えています。

このような原点があるからこそ、日本人は違う考え方に対しても柔軟で順応力が高く、外国の文化と衝突せずによく消化できる優れた能力を持っているのではないのでしょうか。明治時代には“和魂洋才”といって西洋の文化文明を大量に取り入れましたが、それで日本の文化がおかしくなることはありませんでしたし、第2次世界大戦後は占領軍である米軍にすぐになじみ、先進的な文化と文明を持つ米国に追いつこうとしました。心



山口 昌紀氏

Masanori Yamaguchi

近畿日本鉄道会長

が広くなければこんなことはできません。まさに日本人がその歴史の中で培ってきた、多様性を認め、他者と共存できる力のなせる業といえるでしょう。

ところが近年は、この価値観の共存への認識が薄くなっているように見えて残念です。例えば「護送船団方式」は経済合理性に反するといわれていますが、実は日本古来の農村社会の考え方です。一方、弱肉強食の競争社会は狩猟民族の考え方、日本の文化ではないのですが、こちらのみを良しとし、日本的なものを排除しようとする論調が見受けられます。そもそも経済とは「経国済民」の略であり、経国とは国家鎮護、済民は民が豊かになることです。お金はその手段であって目的ではないはずですが、今の日本は社会も個人もお金を追いかける競争に血眼になり、あちこちで問題が起こっています。ただ、これも新しい日本の文化ができる過程なのかもしれません。飛鳥時代を経て平安時代に国風文化が生まれるまで200年あまり、外国の文化を消化し自分のものにするには、それほど長い年月がかかるものなのです。世界中の文化や経済が渾然となった奔流に巻き込まれている現代の日本は、まだ消化不良の状態なのでしょう。いずれはこの状況を克服できるはずで

今を生きるわれわれに必要なのは歴史の検証です。日本文化を形づくってきた歴史にしっかりとしたまなざしを向けることができれば、現代の日本人が寄って立つべきものが見えてくる、と私は思います。

談